

序言

一 建築様式の再検討

本書は、中世日本建築の様式概念をあらためて問い直すものである。従来の枠組みを再検討し、とくに、和様の変容を見据えた再編と、唐様の痕跡の探究を通じて、日本建築史の新たな読解を開くことが目されている。

「和」や「唐」という歴史用語は、しばしば日本風と中国風を示す対義語として用いられてきた。禅院建築の分野に注目すると、鎌倉時代に中国から伝来した伽藍配置を「唐国を遷来」したものと呼ぶなど、「唐」は中国を意味する語として使われていた。中世後期以降になると、大工文書を中心に「唐様」という語が個別建築の類型を示す語として用いられるようになる。いずれも日本固有のものとの対比で、各々を区別するように用いられてきた。

建築様式の研究は、日本で建築史学がはじまった明治期から活発となった。個別寺社の実態調査が満足に進められていなかった当時、日本建築の体系的かつ通史的な理解が早急に求められたのである。歴史的建造物を具体的な史料に据え、その配置や寸法体系、細部の技法や意匠を詳細に列挙する――。個別具体的なモノを細部に至るまで逐一観察し、帰納的視点から特徴を見出す研究が進

められていった。建築史学を創始した伊東忠太（一八六七～一九五四年）のちも関野貞（一八六七～一九三五年）や天沼俊一（一八七六～一九四七年）らが調査を重ね、日本建築史の体系化が試みられてきた。

現在、一般にも知られる「和様」「大仏様」「禅宗様」という三つの様式概念は、戦後に太田博太郎（一九二二～二〇〇七年）が「天竺様・唐様の名称について」（一九五五年）という論考のなかで再定義したものである。^①「和様」「天竺様」「唐様」と戦前に呼ばれていた言葉をあたらしく言い換えたのだ。

このうち天竺様は東大寺大仏殿の再建時に重源が導入したもの、唐様は禅宗を介して導入されたもので、ともに中国の宋からもたらされた類型を意味するが、太田にとつてこれらの名称が問題となった。まず、天竺という言葉はインドを想起させるうえ、鎌倉期に再建された東大寺大仏殿とは関係がなく、江戸時代の大工書などにもほばみえない。いっぽうの唐様という言葉は、絵画・書・座敷飾などを対象にひろく歴史用語として用いられ、唐という言葉も古くは奈良時代から見い出せるが、各時代と分野ごとにその内容も大きく異なる。

このような理由から太田は、鎌倉再建・元禄再建の東大寺大仏殿や京都方広寺大仏殿で用いられた「天竺様」を「大仏様」へ、禅宗の建築を「唐様」から「禅宗様」へと改めるのが適切であると説いたのである。すでに長く使われ一般化している名称をみだりに変えるべきではないとしつつも、「名が体をあらわす」べきであること、すなわち実体をより良く示す名称が望ましいという。その結果、「大仏様」「禅宗様」という従来とはまったく異なる名称へと、大胆に再定義するに至ったのである。

二 類型化の難しさ

太田の再定義により、建築様式の名称自体はともわかりやすくなったようにみえる。しかし、事はそう単純ではない。建築の類型化は想像以上に難しい。建築は時代や地域ごとにそれぞれ固有の特徴や歴史をもち、多様な姿をみせる。単純な様式概念による分類だけでは、現実の多層性を的確に捉えることはできないのだ。

いまに至るまで建築史家はこの類型化をめぐる困難さに直面してきた。たとえば伊東忠太は、「スタイル」や「流派」という言葉を用いながら、日本建築を世界のなかに位置付けつつ、時系列順に通史を説明しようと試みた。しかし、論考によりその内容をそのつど変え、様式の種類や枠組み自体を絶えず再編していった。建築の通史を数多く執筆し、様式概念のわかりやすさを追い求めた太田ですら、和様とその折衷に対する解釈を、書籍や論文ごとに変えていった。複雑な現実のただなかで、「名が体をあらわす」というわかりやすさの獲得は思いのほか難しいのである。

類型への認識の枠組みも一因に、大きな論争を巻き起こしたこともあった。有名な法隆寺再建非再建論争である。

伊東ののちに論陣を張った関野貞は、「異時代同様式」的態度を批判した。⁽²⁾ 読んで字の如く、時代が変わっても建築の様式が同じであることを認めない態度だ。ひとつの時代にはすべて同じ建築様式が占めるという、いわば「一時代一様式」的態度を固持したのである。法隆寺再建非再建論争の発端は、この関野流の歴史観とも無関係ではない。関野は詳細な現地調査をもとに、法隆寺金堂・塔・中門にみる意匠が飛鳥時代の法輪寺・法起寺と同じであると考えた。しかし、この結論を

「二時代一様式」の立場で捉えるなら、文献史料をもとにした説——現在みる法隆寺が飛鳥時代のものではなく、天智九年の焼失後に再建されたという説——と矛盾してしまう。飛鳥時代のデザインと、焼失後数十年経った和銅時代のデザインとのあいだに同一性が見出されてしまうと、関野の様式史は破綻してしまうのである。

ご承知のとおり、関野の法隆寺非再建説は、のちに発掘調査の成果などをもとに批判されるに至った。⁽³⁾ひるがえってこの結果は、当時の日本に存在する建築の状況が「二時代一様式」ではなかったことを物語る。のちには有名な薬師寺東塔や興福寺東金堂でさえも、意図的に古態をモデルにデザインされたことが明らかとなった。古代・中世において、デザインの時制を意図的に取捨選択することが可能だったのだ。建築は同時代において、必ずしもすべてがまったく同じデザインで計画されたわけではなかった。複数の建築を同時代において類型化することすら、多くの困難さがつきまとうのである。

三 様式概念が覆い隠すもの

個別の建築はそれぞれに特有のキャラクターを持つ。全体が多くの部分から成立しながらも、一つ一つの部分が固有の歴史を持つからだ。この現実——建築がもつ意味の多層性をめぐって、単一の様式概念はときにそのキャラクターを覆い隠してしまうことすらある。

太田が再定義した禅宗様建築の典型例として、円覚寺舍利殿（国宝・神奈川県・一五世紀・図一）や正福寺地蔵堂（国宝・東京都・一四〇七）が挙げられる。この様式の条件として太田は、基壇・床・礎

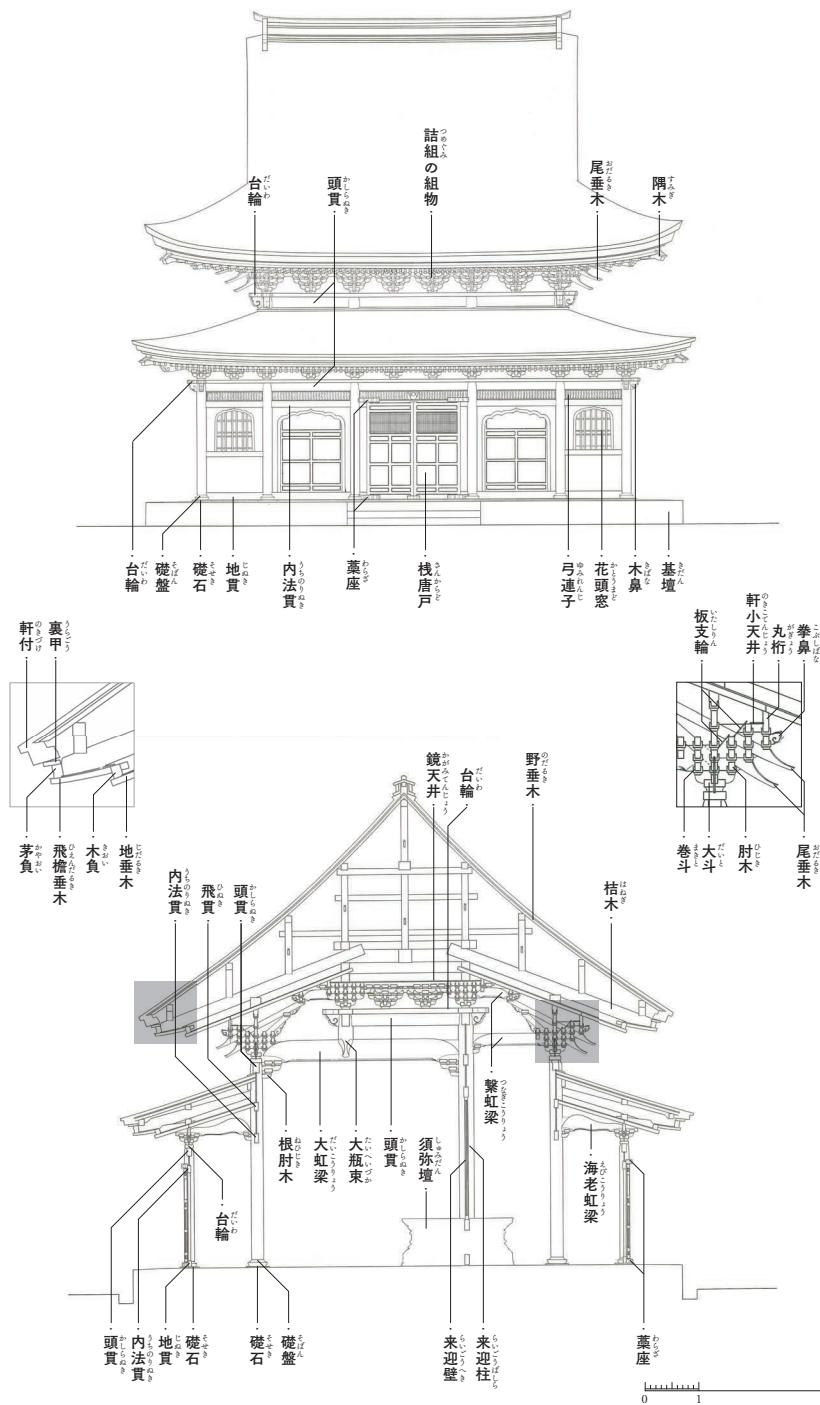


図1 円覚寺舎利殿 立面図・断面図

石・礎盤・粽・貫・台輪・組物・組物の配置・軒・梁・構架(マコ)・天井・窓・欄間・扉・壁・須弥壇・高欄・絵様繰形・彩色といった細部要素²との特徴を列挙する。これらの諸条件をセットでクリアすることで、全体が禅宗様建築として理解されるというわけだ。「一時代一様式」的態度と比べると時代概念が鳴りを潜め、まるでチェックリストのように様式の条件が徹底して並べられる。建築の全体をすみずみまで構成要素へと分解して理解する機械論的な、あるいは要素還元主義的な態度がここに透けてみえる。ある種のモダニズム史観である。

太田によるこの枠組みは、先の二例をより先鋭的なベンチマークとして、機械論的に説明することになったと言える。しかし注意したいのは、中世における禅院の建築を見渡すと、太田が定めた禅宗様の条件に当てはまらないものが散見されることである。柱に粽があるのに扇垂木がなかったり、詰組なのに台輪がなかったり、虹梁があるのに土間ではなかったりするものなど、枚挙にいとまが無い。類型(クラス)とその個別条件(メンバー)の対応関係が、事例ごとに大なり小なり異なるのである。条件が揃う傾向にあるのは、まさに先に挙げた典型的な二例と、典型的な事例をモデルに復原されたものといってもよいくらいである。さらには困ったことに、禅宗のものではない建築ですら、先に挙げた禅宗様の条件を多く採用したものが散見されるのだ。

にもかかわらず、たとえば詰組といった部分の個別条件が含まれるだけで、その建築全体を禅宗様と名指ししてしまうような誤解が、すなわち個別条件と類型の階梯を混同してしまう誤解が、いまに至るまで学会内ですら散見される。おのおのの個性を演繹的に束として包括しようとしたその先で、仮説形成(abduction)を飛び越えた、ある種の過剰一般化(overgeneralization)が読み取れるのである。

このような問題は、禅宗の建築を中心に、歴史的建造物の復原現場ですら生じていた。⁽⁴⁾ 創建当初の姿を証明するエビデンスが不十分であつたにもかかわらず、当時の研究者・修理技術者・文部技師といった保存修理に関わった当事者たちが、かつての創建時の主屋の屋根が典型的な唐様建築の姿形を完備していたに違いないと、想像を加味しながら解釈したことがあつた。その結果、円覚寺舍利殿を中心とした典型例を理想的なモデルに据え、当時の様式概念へ無批判に従うことで、想像的介入のもとじつさに復原してしまうことがあつた。このような現状変更が施された中世の建築は思いのほか多く、大正期から昭和初期にかけて、単一の様式にかなう姿形へと修復されたものが散見されるのだ。この過程で、屋根や軒廻りを中心に、理想像にそぐわない古材が大胆に取り替えられ、その結果、部分にみる歴史的痕跡が消去されることがあつた。ひとつの様式概念が、個別具体的な建築のキャラクターを上書きしてしまったのである。

四 方法としての「建築史学史」

ここで問うているのは、建築様式を構築すること自体の是非ではない。たしかに、日本建築を体系的に理解するには様式の類型化が不可欠である。しかし、個々の建築の特徴を帰納的に抽出し、それらを相互に比較しながら包括的に相違点や類似点を検討する過程、すなわち、類型を導き出す演繹的な視点には、単なる「わかりやすさ」を求めるだけでは乗り越えられない諸問題がある。このような事象が、建築史学の先人たちの営みにも大なり小なり見え隠れしているのだ

「かたち」を対象とする様式史学では、帰納的態度と演繹的態度の双方が求められる。さらに、

この二つの視点が交錯する状況下では、実在するモノとしての史料の情報が折々に更新されるだけでなく、歴史家が「現在」という時代を生きている限り、その時々の歴史観や理念が意図的に、あるいは無意識のうちに反映される。建築様式が軌道修正を伴いながら再生産されていくダイナミズムは、こうした思考の動的な枠組みとも無関係ではない。では、このような状況をふまえつつ、建築がもつ多層的なキャラクターを、いかにしてより豊かに再評価できるだろうか。

これらの問題意識をもとに、本書では「建築史学史」という方法を用いる。建築様式にかんする既往研究をただ事実確認的に集積し、並べ立てること自体が目的ではない。具体的な史料の読解を進めながら、先人たちが築いてきた様式とその枠組みを客観的に疑い、様式が生成される場を超越論的に検証すること。この作業を通して、日本建築のあたらしい読解の可能性を模索することこそが目されている。

本書の第一部「和様の系譜学——変容を辿り再編する」と第二部「禅宗様をほどく——唐様の痕跡を探る」は、いずれも日本中世建築の様式的問題を対象としている。第一部は和様の変容に留意し、その歴史的系譜を再編成することを主眼とするのに対し、第二部は既存の禅宗様という様式を解きほぐし、その内部に潜む唐様の痕跡を探索することを志向している。

第一部は、「和様」という様式概念をめぐる、その成立と展開の過程に焦点をあてる。ここでの中心的な作業は、和様がいかにして形成され、いかなる変容を重ねてきたのかを辿ることにある。太田は先に挙げた論文のなかで、和様に対する評価の歯切れがきわめて悪い。また、自らの書籍の改訂のたび、和様と折衷様を中心に、様式分類のアップデートを幾度も繰り返していた。和様建築の個別具体的な区別と類型の評価に、多くの困難さがみられるのである。和様の変容の軌跡を見極

めたうえで、いかにそれらを分類・整理し、既存の枠組みを再編することができるか。和様という概念が差し示す広範さと曖昧さを乗り越え、複数の系譜学的視座からその全体像を読み直すことが目されている。

対して第二部は、「禅宗様」を対象とし、従来の様式理解に内在する過剰な固定観念や解釈の枠組みそのものを問い直す。「ほどく」という語が象徴するように、すでに構築されてきたこの概念の織物を解体し、そのなかに潜む多様な唐様の痕跡を探り出すことが想定されている。討論でも議論されているとおり、鎌倉時代に京都や鎌倉へ本格的に禅宗がもたらされた初期の建築デザインを、その痕跡から類推することも伏線として想定している。章全体は、既存の分類の枠組みをいったん分解し、内部に潜む非均質な、あるいは未知のものを顕在化させる、解体と読解への志向が中心となる。

本書に収められた各論考は、二つのシンポジウムでの討議の記録を中心に構成されている。シンポジウムの現場で登壇者たちは、事前に用意したサマリーをもとに発表を行ったが、これらのサマリーは一部が学術誌や報告書として限定的に公開されているものの、広く流通しているとは言いがたく、入手性も良くない。こうした事情を受けて、本書では各サマリーをあらためて学術論文としてまとめ、討議の流れのなかに位置づけている。

このような理由から、本書は単に論文を集めただけのアンソロジーではない。それぞれの論考は独立したもの——事実、各論考で示された様式論や概念もじつに多彩だ——でありながらも、討議という場を介して互いに共鳴している。討議は各論考がもつ立場の違いや多様な視点を、ときに反発しながらも受け止めつなぎあわせる、いわば蝶番の役割を果たしている。こうした全体の構成に

よって、各論考は単独では見えにくい意味や問いを新たに獲得し、討議を結節点に強度のある学術的ネットワークを形づくっている。くわえて、各部において、それぞれ別の視点からの新しい論考を掲載し、議論をより立体的に考えられるよう努めた。

建築史学の分野でみる様式概念のうち、とくに和様という言葉は、戦後以降に彫刻様式の分野でも用いられるようになったという⁵⁾。しかし、そのベースとなる建築史学での議論は、いまま研究者により大なり小なり異なる。和と唐という言葉が対となり、日本の建築や空間の解釈をさまざまに生み出し続けている。このような文脈からも、様式概念の再検討は、わたしたちが拠って立つ地盤自体をより根本から疑い、新たな事象を発見することにもつながるはずだ。その発見が、他領域の学術分野や、日本を超えた東アジアでの事象へと、複数のチャネルから接続する契機ともなるだろう。日本の建築史、ひいてはその歴史観を学際的に問い直す重要な一石となるにちがいない。

注

- (1) 太田博太郎「天竺様・唐様の名称について」(『建築史研究』彰国社、一九五五年)。
- (2) 「異時代同様式」という言葉については、工藤圭章「法隆寺論争」(日本建築学会編『近代日本建築学発達史』丸善、一九七二年)に依る。
- (3) 「法隆寺再建非再建論争」については、以下を参照のこと。村田治郎『法隆寺の研究史』(中央公論美術出版社、一九八七年、初出一九四九年)、工藤註²前掲論文、藤井恵介「法隆寺は再建か非再建か——法隆寺再建非再建論争の展開」(『寧楽美術の争点』グラフ社、一九八四年)、野村俊一「法隆寺再建非再建論争」(松田達・横手義洋・林要次・川勝真一編著『建築思想図鑑』学芸

出版社、二〇二三年）。

(4) 大正期から昭和初期にかけて実施された唐様（禪宗様）建築の復原経緯については、以下を参照のこと。青柳憲昌『日本近代の建築保存方法論…法隆寺昭和の大修理と同時代の保存理念』（中央公論美術出版、二〇一九年）。

(5) 皿井舞「平安彫刻史論における「和様」言説の規範化とその過程」（『京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラムグローバル化時代の多元的人文学の拠点形成 第二回報告書』二〇一三年）。

図版出典

図1 野村俊一編『伝達と変容の日本建築史——伝わるかたち／伝えるわざ』（勉誠社、二〇二二年）より転載、西松秀記・野村俊一研究室作成